

「ストアーズオブシーズン」

クリスマスケーキ、クリスマスツリー、サンタさんのぬいぐるみ、トナカイのぬいぐるみなど、いろんなものが店に置いてあり、気分はスッキリクリスマス。まあ、私もなんですけどね。

私は、竹井 愛花です。小学校六年生です。好きな色は、水色です。習い事は、ピアノと習字です。私は、意外にドジです。こんな私ですけど、よろしくをお願いします。

私の大親友の山手 梨姫。

今、梨姫と買い物中……。そう、十二月二十五日にみんなで、パーティをすることになり、その飾りに使う道具を買いに来ました。ここは、「ストアーズオブシーズン」と言うお店。意味は、季節の店。その季節にあった物が置いてあります。

「ここは、すごいね。」

と、愛花が言った。

「うん。ねえ、見て！これすごくない？」

梨姫が言うと愛花は、

「ほんとだ！すごくキラキラしている。」

二人は、あまりのすごさに感動しました。

ようやく二人は、店から出てきました。キラキラした物がいっぱいです。

「ただいま。」

と、愛花が言った。

「おかえり。」

と、愛花のお母さんが言った。

「おじゃまします。」

と梨姫が言った。

「こんにちは。」

お母さんが言った。

どうやら、家に帰ってきたようです。

「どうしよう、飾り。どうやって付ける？」

愛花が言った。

「……愛花は、入り口の方の飾り考えて。私は、反対側やるから。」

梨姫が言った。

「うん。分かった。」

愛花が言った。

二人は、紙にどうゆう飾りにするか、書いた。

愛花のは、ぬいぐるみを置いて、ツリーを入りに置いて、周りは、キラキラした物がいっぱいだ。

梨姫の方もいっしょで、キラキラした物が多い。天井の方は、真っ白！床のほうも、真っ白でまさに、一面雪だけみたい。たまに、綿が置かれている。

「二十五日が楽しみ。」

愛花が、言った。

「そうだね。」

梨姫が、言った。

何分ぐらいだろう？しばらく黙っていた。そして、三十分ぐらい経った時、愛花のお母さんが部屋に入ってきて、

「梨姫ちゃん。今日、家に泊まっていきなさい。梨姫ちゃんのお母さんに聞いたら、いいって。あ、これ着がえ。お母さんが持ってきてくれたのよ。」

と言った。

「ありがとうございます。」

梨姫が言った。

お母さんは、部屋から出て行った。

「よかったね。」

「うん。」

一次の日一

「じゃあね。また明日。」

愛花が言った。

「ありがとうございました。・・・バイバイ。」

梨姫は、自分の家に帰った。

愛花は、梨姫が帰ったあとで、前から気になっていた所へ行った。そこは、ストアーオブシーズンの近くのとっても不思議な店。

「ここだ。なんか、いつの間にかあったんだよね。」

愛花が不思議そうに小声で言った。

すると、扉が開き、雪だるまが出てきました。そして、

「いらっしゃいませ。どうぞ。」

と言った。

私は、何が何だか分からなくなり、

「はい。」

と答えてしまった。

びびりながら、入っていくと、サンタさん、トナカイが居た。そう！ここは、一年中クリスマス。クリスマスの世界へ来てしまったのだ。

「こんにちは。わしは、サンタだけどちゃんと名前があるんじゃない。クリスじゃ。よろしく。このトナカイは、メスが、雪で、オスが、滝。雪だるまが、ラレじゃ。」

とクリスが言った。

「私は、竹井 愛花です。よろしくお願ひします。」

私は、大分落ちついてきた。

「さあて。お前さんが、来たし最初の仕事をするか。」

とクリスが言った。

「あの・・・仕事って何ですか？」

と愛花がおそるおそる聞いた。

「お！あるある。今日は、一段と忙しくなるぞ。」

滝が言った。

「ってこれ、手紙じゃない！これ、どうするの届けるの？」

愛花が聞いた。

「あはははは。」

雪が思わず笑った。

「笑わないでよ。雪。」

愛花が、言った。

「ごめんごめん。あまりにも、すごいことを、言うから。あのね、この手紙は、私らあての手紙。」

雪が言った。

「そうなんだ。」

「分かったかね。さあ、仕事をするぞ。」

クリスが言った。

「うん。」

愛花は、この人達に慣れたようだ。いろんな手紙があった。いろいろ見ていると、ドアの近くに手紙が置いてあった。

「何これ？」

愛花は、手紙に気が付いた。

「あけて見るよ。」

と愛花が、あけて読み出した。

「私と勝負しろ。勝負の内容は、電話で言う。・・・だって。」

と愛花が言うと、電話がかかってきた。

「はい。もしもし」

愛花が言った。

「・・・お前は、愛花か？手紙読んだ？」

「はい。読みました。あなたは、誰？」

「私は、麻衣花。勝負というのは・・・最高のクリスマスツリー、ケーキを作る勝負だ。」

「最高のクリスマスツリー、ケーキ？」

「そうだ。明日から、そうだな。十二月二十七日まで。二十八日にストアオブシーズンの前に来い！時間は、午前九時三十分。遅れるな。」

ガチャ。

「切れちゃった。」

「何なの？」

「勝負しろって。・・・私に。」

「愛花に？」

「うん。」

私は、さっそく準備をした。まず設計図を描いた。意外と早く出来た。

しばらく真剣にやっていたら、クリスが私のところに来た。

「愛花。言い忘れとったんじゃが・・・実は、お前さんがここに来るなんて最初っからわかっとたんじゃ。」

とクリスが言った後に、雪が、

「てゆうか。あたしたちが、愛花をおびき寄せたって感じ。」

「えええ。じゃあ、私、ある意味・・・罠に引っかかった？」

「うん。まあね。」

愛花は、ショックを受けた。

こんな、変なことをしていても、約束の、二十七日に間に合った。そして、作った物を持って行った。

「ほう。いいもん作ってきたじゃねーか。」

麻衣花だ。麻衣花もすごいな。

「お前の勝ちだ。」

と麻衣花が言った。

「え？」

愛花はおどろいていた。

「もともと。勝負する気なんか、一つもないね。」

「ど、どういうこと？」

「今日。本当は、何日か知ってるか？」

「え？二十七日よ。」

「実は、今日は、十二月六日だ。」

「六日って、あなたが、電話してきて、私が、ストアオブシーズンの店に行った時！」

「そうさ。これを、やるよ。これを、食べる。」

「何これ。」

「これで愛花は、自分に・・・本当の自分にもどれる。さあ。食べる。」

と言って麻衣花は、どこかに行った。

「食べよう。」

愛花がそう言って食べると、ストアオブシーズンの店の中で眠っていた。

「そうか。あれは。夢だったんだ。」

と言い、店を出て、ドアがあった所に行った。

「ない。なくなっている。やっぱり。夢だったんだ。さあ、帰ろう。」

と独り言を言いながら、家に行った。

夢だったけど、楽しかった。